架橋漫錄

——北上大橋開通式に臨みて——

和泉生

東北地方に於ける府縣道は永久的架橋に乏しく、縣財政の關係上木橋の架設すら困難で、幼稚なる渡船に依り僅に人馬の交通のみに限られ、藩政時代の交通を偲ばしめるものも尠くない。岩手縣内を縱走すること蜿蜒五十餘里の北上川は、往昔より降雨期毎に氾濫し其の都度沿岸地方が致命的打擊を被つたので、現在では殆ど永久的橋梁に架換され面目を一新してゐるが、此の北上大橋を最近迄は哀れな一渡船場に過ぎなかつた。それが爲、府縣道猿澤花泉停車場線は、縣南の中樞部と北部要衝の地とを連絡し、國有鐵道花泉驛及隣縣氣仙沼町に達する產業文化の開發上重大使命を有する路線なるも、北上川に遮斷せられ其の效果を充分に發揮し得ない感があつた。然るに近時高速度交通機關の發達と各種物資々源の開發に伴ひ、地元民大擧して架橋の急速實現を熱烈に縣當局に迫つたのであるが、地勢の關係上多額の工費を要し且架橋上技術的困難を生ずるに因り之が實現は殆ど絕望の狀態であつた。然し多年の要望が遂に達成される曙光が訪れた。則ち昭和八年時局匡救土木事業に其の機を得たのが滿願成就の端緒となつた。

架橋工事は三箇年で竣功の豫定であつたが、昭和八年十月より同十三年三月に至る四年半の長日月を費したことは

遺憾な事であるが、其の主なる原因は、昭和十年八月北上川の氾濫に遭ひ肝心の鐵材全部を河底深く沈下したからである。請負者鶴見製鐵造船株式會社は、之が引揚作業に躍起となり約一年近くを棒に振つて苦勞したが、水深十米餘の箇所とて漸くのことで約四割の鐵材引揚に成功したのみで殘りの六割は放棄を觀念するより途がなかつた。運の惡い時は惡いもので其の頃から鐵材が暴騰し、請負者は全く泣面に蜂と言つた形で酷く自棄氣味に陷つたらしい。間もなく鐵槌の響も止み現場から人影が消え去つて仕舞つた。當面の責任者たる土木課長代理佐藤技師も是には閉口し、解決策をあれやこれやと練つた揚句が災害補給金壹萬五千圓を出さうと言ふ話で纏りが附いた。此の補給金の苦面に佐藤技師が涙ぐましい奮鬪を續けた事實は知る人ぞ知るであるが、之でこそ、今次聖戰に日夜活躍されて居る靑木前土木課長にも顏が立つと言ふものだらう。

本橋の命名に付ては右岸の彌榮村と左岸の薄衣村とが猛烈に競合ひ、薄衣村側では從來の渡船場が薄衣渡船場だつたから是非薄衣橋にと强請り、彌榮村側では彌榮は新橋に最も相應いからどうでもこうでも彌榮村だと頑張り、容易に妥協が成らぬので、兩者を宥めるのに佐藤技師も頭痛を病んだ樣だ。そこで雪澤知事の命名されたのが喧嘩兩成敗式の北上大橋なんだそうな。

幾多の難關を克服して遂に架橋が實現した時の地元民の歡喜と感激は想像以上であつたらう。地元では此の歷史的事業の完成を衷心より慶祝する意味で盛大に竣功式を擧行する樣計畫が進められたが、縣は今次事變に鑑み、協賛會の組織等も遠慮せしめ極力御祭騷式を排し、七月三十一日いとも嚴肅裡に竣功式を擧行した。此の日朝來の薄靄も開式の午前十一時頃には紺碧に澄み渡り絕好の日和となつた。參列者四百名を突破し地方空前の盛典を觀んものと遠近町村民の參集する者其の數を算し得なかつたと謂ふ。

佐藤技師の工事報告、雪澤知事の式辭に續いて關係町村長等の祝辭があつたが、何れも架橋の恩惠に滿腔の謝辭を惜まぬものばかりであるが大體型の通り故今更記す程のこ

ともあるまい。內務大臣よりも「北上大橋の竣功を祝す」との祝電があり、田村子爵、鶴見祐輔氏其の他多數名士の祝電もあつたことは此の盛典をより意義あらしめたであらう。

然し乍ら此の架橋費に對しては三年度繼續して政府より三分の一の助成を受けたに拘らず、式辭の何處にもそれらしい文字の發見出來ないのを物足りなく思ふ。宿願達成の端緒を政府の助成に求めた以上、何とか一言を加へてもよもや北上大橋が北上小橋に化けはしなかつたらうにと輕い憎まれ口を叩いてみたくなる。

次に工事の概要を述べて御參考に供しよう。

位　置　岩手縣西磐井郡彌榮村
　　同　縣　同　郡薄衣村

橋　長　二〇四米

型　式

主徑間　鋼タイドアーチ橋　一連　一〇〇米
側徑間　ゲルバーガーダー橋　三連　六三米

橋　臺　左岸　コンクリート重力式
　　右岸　扶壁附鐵筋コンクリート中空式

橋　脚　鐵筋コンクリート中空式

鋼材噸數　六一〇噸

取附道路延長　四二三米　左岸一〇三米　右岸三二〇米

有效幅員　六米

工事費　二五一、二七九・六六圓

工　費　二四一、〇〇四圓
（補給金一五、〇〇〇圓ヲ含ム）

土地買收費　三、六八五・四一圓
物件移轉費　二、九二二・三〇圓
其他補償費　二、一五七・四七圓
器具機械費　一、五一〇・四八圓
工事雜費

勞力延人員　五六、八七七人

着　手　昭和八年十月十九日

竣　功　昭和十三年三月三十一日

請負者　鶴見製鐵造船株式會社（元淺野造船株式會社）
　　有田組、湯淺菊太郎